吉田遺跡採集の円筒埴輪について

吉　田　　寛*

はじめに

1967年、小野忠熙氏を団長とする山口大学構内吉田遺跡調査団によって、現在の家畜病院から女子寮に至る間の丘陵の一部が調査された。この地区は調査団による地区割の第Ⅱ地区（現在の地区割のP～S－18～21地区）と呼称されている部分にあたり、調査開始当初から円筒埴輪を出土する地区として注意が促されていた[1)]。しかし、埴輪資料の図面等が公表されたことはなく、その具体的様相は今日に至るまで不明確なままであった。

ところで筆者は山口大学考古学部に所属していた折、同部所有の倉庫で吉田Ⅱ地区より表採されたという円筒埴輪片を見い出した。この資料は1979年11月3日に採集されたという記録が存在するものの、筆者が実見した当時（1982年）は、まだ一部が未水洗の状態であった。これらの埴輪片が考古学部に所蔵されるようになったいきさつは明らかでないが、同部は例年11月初旬前後に、山口盆地内の遺跡パトロールを行っており、これらの資料もその際の活動時に採集されたものと推定される。

吉田Ⅱ地区出土の円筒埴輪の様相が不明確な現在、考古学部が所蔵している資料の意義は非常に大きく、今回紙上を借りて、資料紹介と若干の考察を行いたい。

吉田Ⅱ地区採集の円筒埴輪

吉田Ⅱ地区より採集された円筒埴輪は小破片であり、全体の形や直径等を復原できるものはない。しかし一部には、比較的保存状態の良好なものが存在する。これらの資料はタガの形状や調整の方法、及び胎土や色調より大きく二類に分類できる。

Ⅰ類（Fig.49，1～9）　タガの断面が台形で、高さが0.8㎝程度と突出度が比較的強いもの。色調は黄橙色を呈するものが多く、後述するⅡ類と比較するとやや明るい色調となる。胎土は精選されているが、若干の微細砂粒を含む。焼成は良好で、土師質である。黒斑は認められない。調整は外面にやや粗いタテ刷毛、内面に丁寧なナデを行うものが大多数である。外面のタテ刷毛は、タガ貼付以前の一次調整の際に施されたもので、タガ貼付に伴うヨコナデによって切られている。タガ貼付後の二次調整は行われていない。内面には一部にタテ刷毛が残存する資料（8・9）があり、ナデ調整が行われる以前に、部分的にタテ刷毛が施されていた可能性もある。保存状態が良好である1は、タガ上面両端にほぼ2

*　Yutaka YOSHIDA　山口大学人文学部考古学研究室

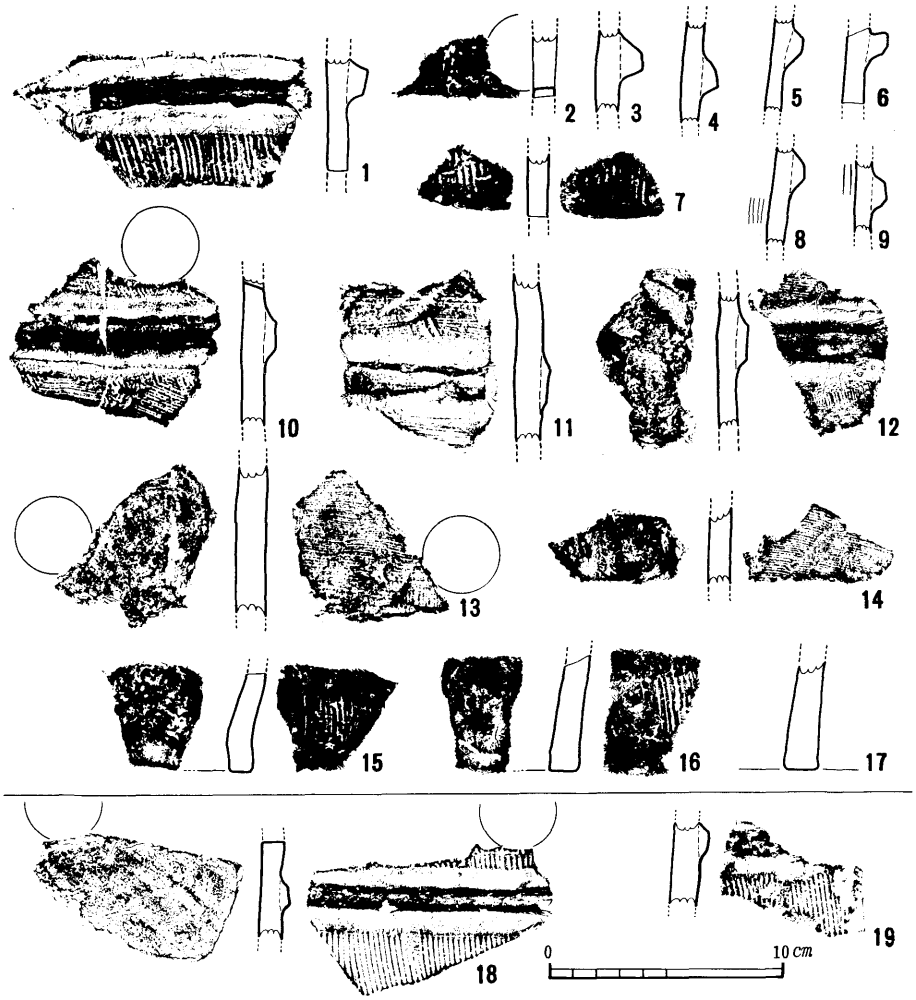

Fig. 49　円筒埴輪実測図（1～17 吉田第Ⅱ地区、18・19 大門古墳、山口大学考古学部蔵）

cm間隔で小さな凹みが認められ、また内面のタガに対応する部分にも指オサエ痕らしきわずかな凹みが存在する。これらはタガ貼付の際に残った痕跡と思われる。なお円形スカシ孔の一部が残存する小破片（2）も存在する。

Ⅱ類（Fig.49，10～14）　タガの高さが0.4 cm程度と扁平なもの。色調は橙色でⅠ類のものより赤味が強い。保存状態は良好で、胎土は精選されており若干の微細砂粒を含む。焼成は良好で土師質である。黒斑は認められない。調整は外面に比較的細かい刷毛、内面にナデを施すことを基本とする。ただし外面の刷毛はランダムであり、破片ごとに施し方が異なる。即ち10のタガ上位では、ヨコ刷毛の後タテ刷毛が施され、下位ではタテ刷毛の後ヨコ

Tab. 10　円筒埴輪観察表

No.	分類部位	色調	胎土	焼成	調整の特徴	備考
吉田遺跡第Ⅰ地区						
1	Ⅰ類	内・外・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーやや粗いタテ刷毛、タガ付近はヨコナデ 内ーナデ	タガ上面両端と内面にオサエ痕。破片下位は粘土つぎ目で破損
2	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛 内ーナデ	円形スカシ孔の一部が残存。破片下位は粘土つぎ目で破損
3	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明	〃 4.2×〃 6.0 cm程度の破片
4	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明 外ータガ付近はヨコナデか	〃 4.0 ×〃 7.0 cm程度の破片
5	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明	〃 4.0×〃 3.5 cm程度の破片
6	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	やや良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明	〃 3.2×〃 6.2 cm程度の破片、破片上位下位とも粘土つぎ目で破損
7	Ⅰ類	外ー浅黄橙色 内・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛 内ータテ刷毛後、一部ナデ	円形スカシ孔の一部が残存、破片下位は粘土つぎ目で破損
8	Ⅰ類	内・外・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しい 内面にわずかにタテ刷毛が残る	〃 3.0×〃 6.0 cm程度の破片
9	Ⅰ類	内・外・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しい。 内面にわずかにタテ刷毛が残る	〃 4.5×〃 4.0 cm程度の破片
10	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーヨコ刷毛+タテ刷毛(上位) タテ刷毛+ヨコ刷毛+斜め刷毛(下位) 内ーナデ、指紋が一部残る	円形スカシ孔の一部が残存
11	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい赤褐色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーヨコ刷毛+タテ刷毛+ヨコ刷毛(上位) ヨコ刷毛(下位) 内ーナデ	
12	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい赤褐色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛+斜め刷毛(上位) タテ刷毛+ヨコ刷毛(下位) 内ー指削り状の斜めナデ	
13	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーB種ヨコ刷毛、タテ刷毛 内ー指削り状の斜めナデ	円形スカシ孔の一部が残存
14	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーB種ヨコ刷毛 内ー指削り状の斜めナデ	
15	底部	内・外・断ー浅黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛 内ーナデ	
16	底部	内ー橙色 外ー浅黄橙色 断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛 内ーナデ	
17	底部	内ー黄橙色 外・断ー浅黄橙色	精良　微細砂粒を含む	やや良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明	
大門古墳						
18	—	内・外・断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛、タガ付近はヨコナデ 内ー斜めナデ	円形スカシ孔の一部が残存
19	—	内・外・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛、タガ付近はヨコナデ 内ーナデ	

刷毛が施され、さらにその上から斜め方向の刷毛が重ねられている。11のタガ上位ではヨコ刷毛をタテ刷毛が切り、その後さらにヨコ刷毛が施される。下位ではヨコ刷毛のみが認められる。12のタガ上位ではタテ刷毛後斜め刷毛、下位ではタテ刷毛後ヨコ刷毛が行われる。13ではヨコ刷毛とわずかにタテ刷毛が認められるが、両者の前後関係は明確ではない。14はヨコ刷毛のみが認められる破片である。なお13、14に施されたヨコ刷毛は連続的なヨコ刷毛で、いわゆるB種ヨコ刷毛[2]と呼ばれているものに相当する。これにより外面の刷毛調整は数回にわたって施されたものと思われるが、これらはすべてタガ貼付以前の一次調整の際に行われたもので、タガ貼付後の二次調整の際に行われたと思われる明確なものは存在しない。内面調整では、丁寧なナデを施すもの（10）や指削り[3]と呼ばれる斜め方向のナデが施されるもの（12～14）がある。また10では小さな指紋の一部が認められる部分がある。なお円形スカシ孔の一部が残存する破片（10・13）があり、内面のスカシ孔周辺では指オサエが認められる。

Ⅱ類として分類したこれらの5個の破片は、色調や胎土が酷似しており、同一個体であった可能性もある。

底部（Fig.49，15～17）　底部付近の内面に、指オサエやナデを施すもの（15・16）と何ら調整を行わないもの（17）が存在する。15・16の外面にはタテ刷毛が認められる。17は内外面とも風化が著しく、調整は不明である。なお15・16は粘土つぎ目で破損しており、底部付近の粘土帯積み上げが、約4～5㎝程度の単位で行われていることを示している。色調は浅黄橙色で、胎土の状況等もⅠ類の方により近い印象を受ける。

以上、山口大学考古学部所蔵の吉田Ⅱ地区採集の円筒埴輪片を紹介した。資料数が少ないことにやや不安を覚えるものの、上記のⅠ類とⅡ類の間には色調や胎土、調整手法、タガの形状等に明確な違いがあり、時期差ないしは工人差を反映するものとして注目される。Ⅰ類・Ⅱ類とも明確な二次調整を欠くことやタガの形状から、川西編年Ⅴ期[4]（6世紀代）の特徴を示すものであろうと考えられる。

ま　と　め

現在、山口県内で埴輪を出土する遺跡は15箇所[5]を数えるが、そのうち川西Ⅴ期併行期に位置づけられるものは徳山市耳取古墳・防府市塔ノ尾古墳・豊浦町大門古墳、そして山口市吉田Ⅱ地区の4箇所にすぎない。そのうち塔ノ尾古墳[6]の埴輪については、実体が不明である。

ま と め

耳取古墳[7]では円筒埴輪と朝顔形埴輪が検出されている。実測図が公表されているのは、須恵質の胎土を持つ円筒埴輪で、完形に復原できるもの1本のみである。この円筒埴輪は突出度の強い断面三角形状のタガを持つもので、調査者は6世紀初頭に比定されている。ただ内部主体の調査が行われていないことや墳丘も後世の改変が著しいことなどから、現状でこの埴輪の詳細な編年的位置を判断することは難しいように思う。

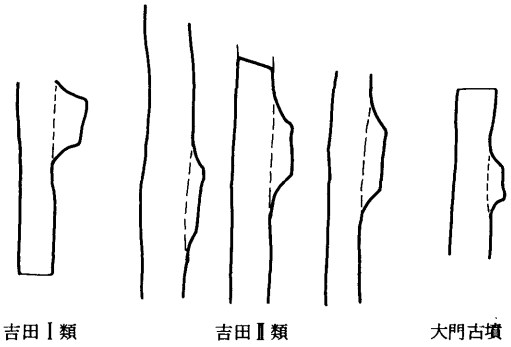

Fig. 50　円筒埴輪タガの形状比較図(S=1/2)

大門古墳では完形の円筒埴輪が採集され、現在豊浦町教育委員会に保管されているが[8]、その実測図は公表されていない。なお山口大学考古学部にも、大門古墳採集の円筒埴輪片が保管されている(Fig. 49, 18・19)。大門古墳もいまだ本格的な発掘調査が行われておらず、詳細な時期比定のできない現状にあるが、後円部に天井部から盗掘を受けた横穴式石室が存在している。富士埜勇氏は、大門古墳の横穴式石室を山口市馬塚古墳[9]や宇部市砂山古墳[10]と対比され、6世紀中葉を下らない時期に比定されている[11]。大門古墳出土の埴輪は外面にタテ刷毛、内面に斜めナデを施すもので、円形のスカシ孔を持つ。タガは断面台形を呈し、突出度の弱いものである。以上の状況から、山口県内に於いて川西Ⅴ期に比定される埴輪の詳しい年代を推定する条件が最も整っているものが、大門古墳であるといえよう。

試みに、これらの円筒埴輪のタガの形態を比較してみたものがFig. 50である。吉田Ⅱ地区採集の円筒埴輪はⅠ類、Ⅱ類とも、タガの突出度や幅は、大門古墳のそれよりまさっていることがわかる。周知の通り、円筒埴輪のタガは時代が下るほど小形化されてゆく傾向にあることが指摘されている。吉田Ⅱ地区と大門古墳はそれぞれ周防・長門と別々の地域に存在しており、直接の対比は慎重を要する。ただ上記の埴輪の特徴を重視する限り、消極的にではあるが、吉田Ⅱ地区採集の埴輪は、Ⅰ類・Ⅱ類とも、少なくとも大門古墳のそれの年代を下らない時期に比定できる可能性がある。よってここでは吉田Ⅱ地区採集の埴輪資料を、一応6世紀前半を前後する時期に考えておきたい。

次に山口県内で埴輪を出土する古墳は、前方後円墳あるいは大形円墳に集中し、その地域の首長墓と推定されるものに多い。川西Ⅴ期の埴輪を出土する塔ノ尾古墳・耳取古墳・

大門古墳もその例外ではない。翻って吉田遺跡の存在する山口盆地周辺のことを考えてみよう。上記の埴輪の推定年代が正しいとすれば、この時期の山口盆地内には朝田墳墓群を除いて埋葬遺跡の発見例が非常に少ない。朝田墳墓群[12]も小規模な墳丘を有するものや横穴墓が主体であり、いずれもこの地域の首長墓と判断されるものではない。よって現状では、山口盆地周辺において6世紀前半代の首長墓クラスの古墳の発見を欠いていることになる。吉田Ⅱ地区における埴輪を出土する地点の調査は十分でなく、遺跡の性格は不明であるが、昭和40年代頃まで古墳の内部主体の一部と思われる石材の露出があったといわれることから[13]、埋葬跡（＝古墳）である可能性は非常に高い。この想定が正しいとすれば、墳丘の形状や副葬品等が全く不明であるとは言え、吉田Ⅱ地区に将来確認されるであろう古墳は、埴輪の出土により、当地域におけるこの時期の首長墓クラスの古墳であった可能性が指摘されるのである。

また前項で指摘したように、吉田Ⅱ地区では明確に特徴を異にする二種類の埴輪が採集されており、これらの埴輪に関する解釈や樹立状況の復原等も今後の課題となるであろう。

以上、吉田Ⅱ地区採集の埴輪についての紹介と若干の考察を行ってきた。吉田Ⅱ地区の埴輪採集地点の周辺では、現在でも表面に多数の土器片が散布している。今後の詳細な発掘調査を期待したい。

最後になりましたが、埴輪資料の実見、実測に便宜をはかって頂いた山口大学考古学部の皆さんに深甚の謝意を表する次第です。

〔注〕

1) 小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡の性格」（『学園だより』第6号、1970年）。
2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年）。
3) 吉田恵二「埴輪生産の復元－技法と工人－」（『考古学研究』第19巻第3号、1973年）。
4) 注2)に同じ。
5) 前田耕次・岩崎仁志・谷口哲一『大塚古墳』（山口県教育委員会、1984年）。P.29の一覧表に、山陽町鴨庄東遺跡出土例を加えたものである。なお鴨庄東遺跡については桑原邦彦「古墳時代」（『山陽町史』、1984年）参照。
6) 桑原邦彦「塔ノ尾古墳と佐波郡の後期古墳の展開」（『山口考古』第13号、1980年）。
7) 村岡和雄・柿本春次『耳取古墳』（山口県教育委員会、1973年）。
8) 豊浦町役場『豊浦町史』（1979年）。
9) 小野忠熙ほか『馬塚古墳』（1971年）。
10) 藤田　等「砂山古墳」（『宇部の遺跡』、1968年）。
11) 富士埜勇「山口県の古墳」（『古文化談叢』第7集、九州古文化研究会、1980年）。
12) 山口県教育委員会『朝田墳墓群』Ⅰ～Ⅵ（1976～79・82・83年）。
13) 注1)に同じ。